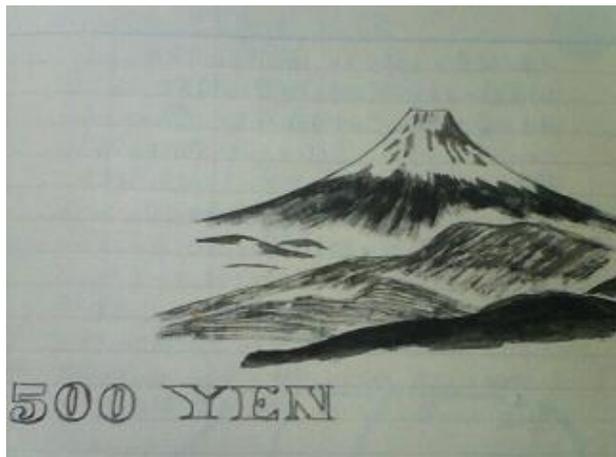


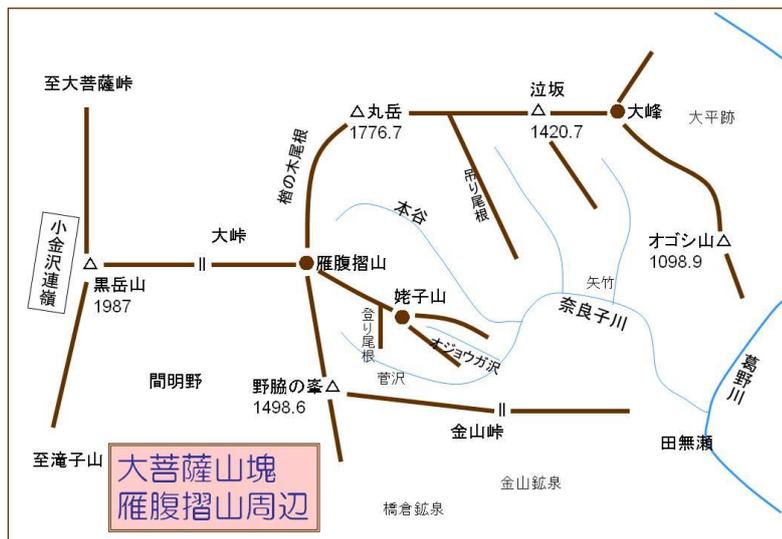
大菩薩	葛野川から檜の木尾根を経て雁ヶ腹摺山	No. 046
-----	--------------------	---------

何度となく想像し、語りもし、そしてそれこそ何度となく財布の中に入っていた山である雁ヶ腹摺山。おもむろに五百円札を裏返してみると遠景に富士。どこで耳にしたか忘れたが、この写真は、大菩薩の南、雁ヶ腹摺山から撮影したものだそう。それほど山でありながら、人はあまり寄り付かない。いわば大菩薩山塊中の秘境であると言える。恩田に言わせると、「美しい響きを持った山名」のうちのひとつ。この旅は彼と二人の(藪こぎも辞さない物好きの)企てである。(上写真:五百円札のコピーを貼り付けられないので自作の模写)



昭和 40 年 5 月 9 日

新宿発0時20分の臨時列車は猿橋駅に2時06分に到着。葛野川の奥の上和田に向かうバスは猿橋車庫を6時45分に発車するため、駅舎の中でシュラフに入りひと眠りする。猿橋車庫発6時45分、上和田行は予定どおり発車し、7時半に上和田に到着。水を汲んですぐに出発。旧大平集落跡(今は藪の中)あたりから道なき道が始まった。大峰(1403m)9時50分、ジリジリと日に照り付けられる上に藪こぎのため袖を下ろしているの暑い。おまけに風もまったくないという最悪のコンディション。10分の休憩で先を急ぐ。泣坂三角点(1420.7m)、目指す雁ヶ腹摺山はまだまだ遠い。ひとつ手前の丸岳でさえ容易ではない。前も後ろも灌木混じりの藪で、諦めようにも戻る苦しみを考えれば前へ進まざるを得ない。泣こうにも泣けない状況だから泣坂というのだろうか。泣坂のコル11時30分。地図上では20m程度の登り下りが数度と見えるが、実際には高さも長さもそんなものでは済まない。地図は大まかな地形の判断ぐらいにしかならない。11時40分、適当なところで昼食をとり12時35分迄休憩。歩けど歩けど近くならないのが藪こぎ。足元の奈良子川の谷を気持ちよさそうに飛ぶトンビがうらやましい。泣坂から丸岳までの間は地図がまったく信頼できず、自分がどこにいるのかが判断できない。丸岳*(1776.7m)まで来て、目の前にどっしりとした雁ヶ腹摺山を見て初めてホッとした。



雁ヶ腹摺山の山頂に辿り着いた時はもう16時55分。長い長い檜の木尾根の藪との戦いを終えてたどり着いた頂上は、誰もいない小さな草原のある灌木帯の中。上和田を出たのが朝の7時半だから、もう食事の一時間を差し引くと8時間半藪こぎオンリーで歩いたことになる。耐えず稜線はずさぬように気を遣いながら、腰をかがめたり、鉈を振るったりの連続で腰が痛い。ポケットから出した岩倉具視をひっくり

踏み跡 < My mountains >

返して南の空を見ると、薄雲の中にかすかに富士がある。そして手前の山脈、チョコリと覗いた小枝、紛れもなく五百円札の景色である。

17時20分、山頂に別れを告げて、今度は迫り来る闇との競争になる。

大峠17時35分、一面の笹原の景観を楽しむ間もなく真木川の源流の沢を足早に下る。途中でトラックが乗せてくれたが、間明野に着いたらもう星屑の輝く19時25分だった。よく歩いたものだ。

体中の痛みをこらえてラジオ体操をし、顔の塩辛さを洗い流したところに19時55分発の大月行最終バスが来た。大月駅から20時50分発高尾行に乗って帰宅。

並でない苦戦をして思いを遂げた雁ヶ腹摺山の名は、深い思い出として残った。

以上

*註:丸岳(1776.7m)について

昭和30年代のアルパインガイドでは、「丸岳」という表示と「大樺ノ頭」という表記が使われていた。

この時期の国土地理院地形図では無名峯になっていたが、

本山行に際して調べた資料の多くが「丸岳」と記していたので、文中では「丸岳」とした。

昭和60年代の国土地理院の地形図では「大樺ノ頭」と表記されるようになり、

現在は「大樺ノ頭(おおかんばのかしら)」が正式呼称のようである。

(修正・更新:2023年10月)